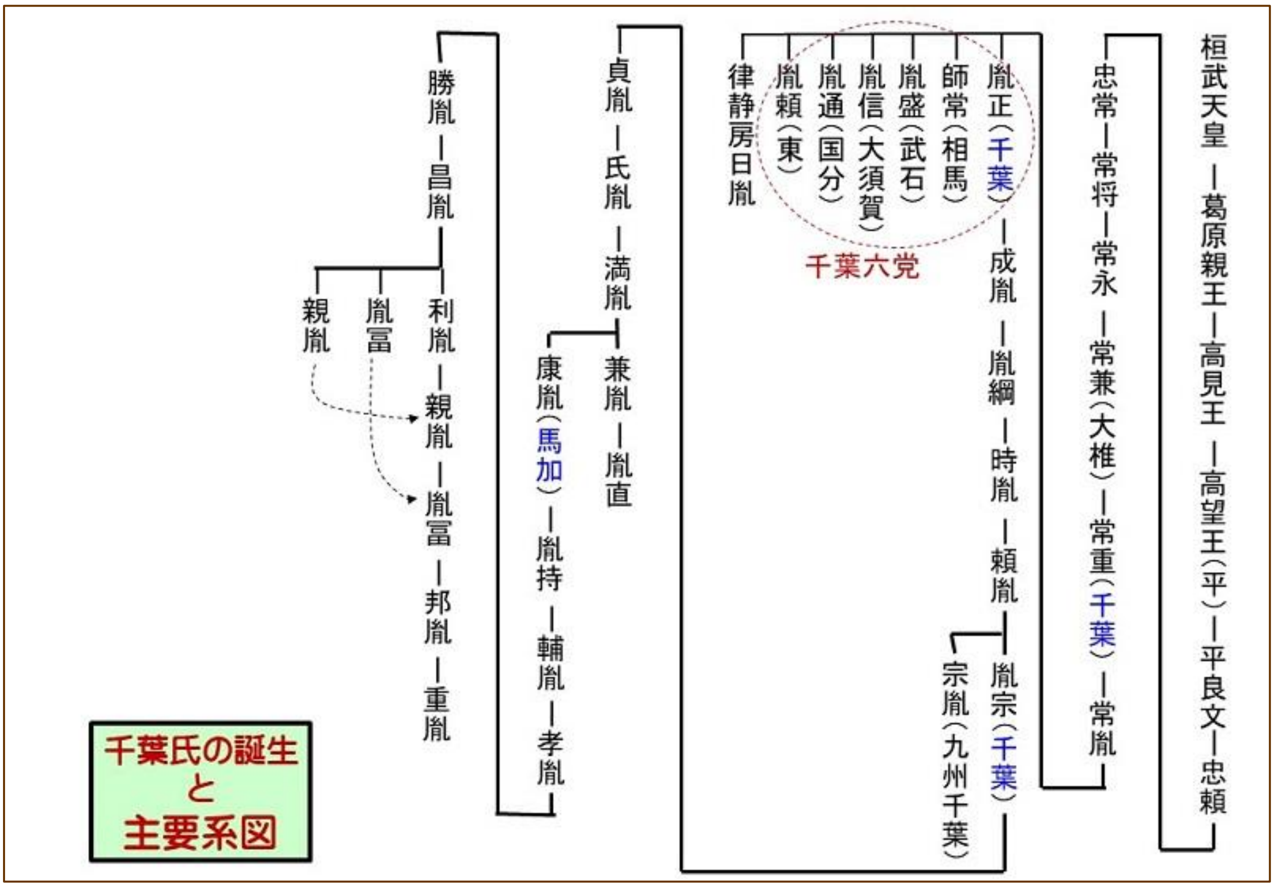
2022.06.14.
T.Kobayashi

千葉さんの家系図調査
千葉氏の誕生と千葉六党の流れ

散歩しながら地元の歴史を学んでみることにしたら、千葉氏の動きが絡んだ遺跡に数多く出遭うことに成り、千葉氏の系図の理解は避けられぬことがわかってきた。
千葉氏の誕生とその後の流れを調べながらまとめてみた。素人の力仕事なので誤字・誤記・誤読があると思われるが、個人的な資料として・・・。

＜1＞ 千葉氏の誕生

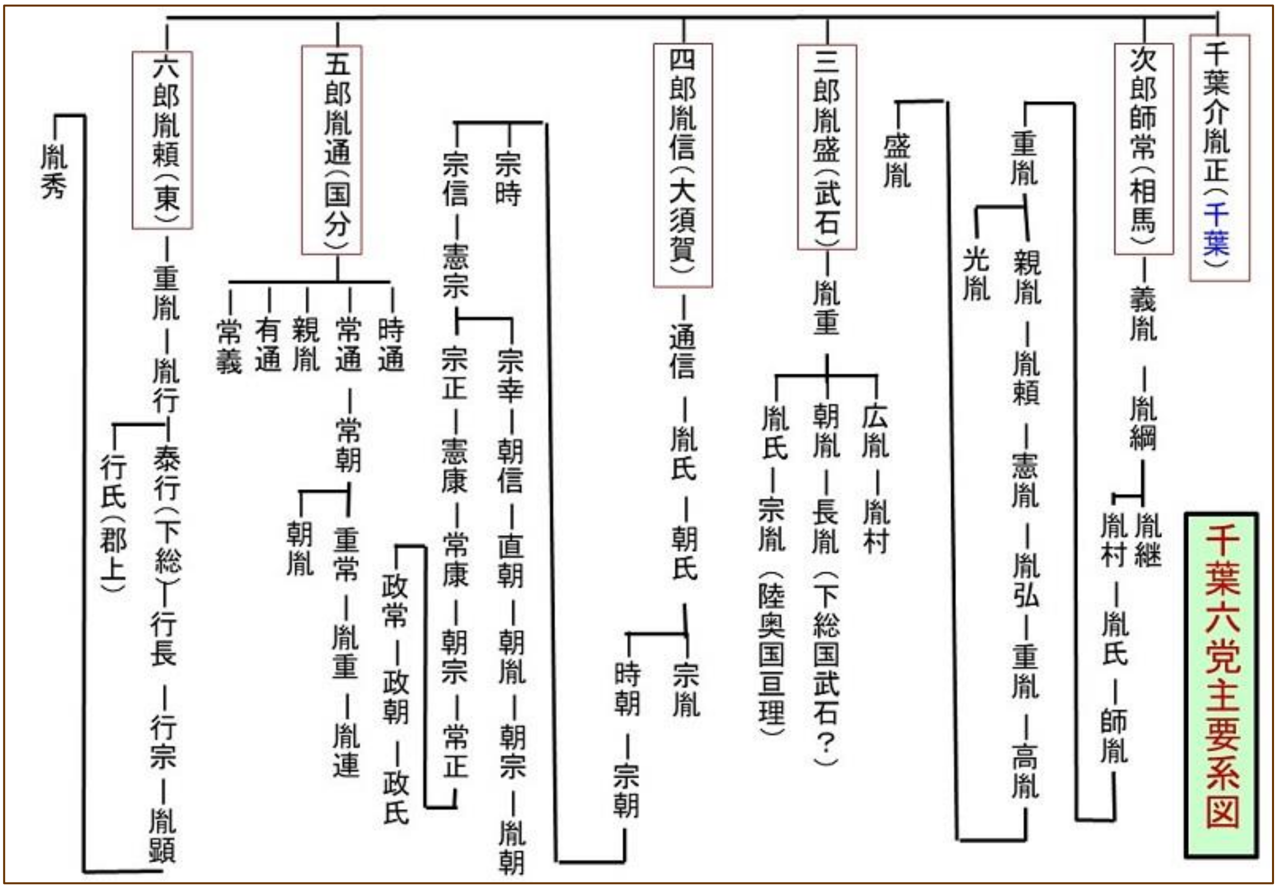
桓武天皇の血筋の高望王（のちの平高望）は上総介となって関東に来た。高望の子らはそれぞれの所領を持ち、継承していった。末子の良文は、当初相模国村岡（現在の藤沢市村岡）を所領としていたが、平将門の乱の前後に下総国相馬郷を手に入れた。
良文の孫である平忠常は東庄の大友城を拠点として上総・下総に勢力をふるっていたが、1028 年（長元元年）に官物納入を巡る争いで安房国司を焼き殺す事件が発生。朝廷は忠常の追討を命じたが、忠常はこれに対抗し反乱は長期化することになった。1031 年（長元 4 年）に忠常が降伏したことで本件は治まることになった。
忠常の子である常将や孫の常長の尽力により戦いで荒廃した一帯は復興し、やがて房総一帯に勢力を広げるようになった。
忠常の曽孫である平常兼は、上総大椎（おおじ：現在の千葉市緑区大椎町）を拠点としており、大椎権介常兼と名乗っていた。
常兼の子である常重は 1126 年（大治元年）に居城を大椎から千葉に移して、千葉介常重と名乗った。所領は千葉庄のほかに相馬郡・立花郷・香取・東庄などだった。さらに所領拡大に努め、1130 年（大治 5 年）には相馬郡内の所領を伊勢神宮に寄進して「相馬御厨（みくりや）」を成立し、永代支配権を



手にした。1135 年（保延元年)、常重は家督を嫡子の常胤に譲って引退。
受け継いだ千葉常胤は、1136 年（保延 2 年）下総国国司藤原親通と源義朝から、官物納入遅延を理由に「相馬御厨と立花郷の割譲要求」を突きつけられる。やむなくこれに応じた結果、相馬国国司に任命されたが、源義朝と主従関係を結ぶことで相馬御厨の永代支配権だけは確保した。
ところが 1159 年の平治の乱で源義朝が平清盛に敗れ、所領はすべて国に没収されてしまった。
1180 年(治承 4 年)、義朝の子である源頼朝が伊豆で挙兵して源平の戦に。戦いに敗れて房総に逃げてきた源頼朝に、常胤は鎌倉に拠点を構えることを進言し、幕府設立にあたり種々の貢献をした。
その結果として所領はほぼ元通り手に入れ、さらに東北・九州などにも所領を得て、千葉常胤は鎌倉幕府屈指の御家人の座を獲得した。
そして得た所領は 6 人の息子に分け与え、「千葉六党」と言われるようになった。
史学的には千葉氏の誕生を、「千葉常胤から」とする見方と、遡ってその発端となった「千葉常兼」からとする見方があるようである。

＜2＞　千葉六党

千葉常胤には七人の息子がいた。天台宗の僧侶となった律静房日胤（にちいん）を除く六人は「千葉六党」と呼ばれた。
長男の千葉太郎胤正は、四代目千葉ノ介となり、その子である成胤が五代目で鎌倉幕府を支える北条執権政治の元で活躍した。
次男の千葉次郎師常は、下総国相馬を父から譲り受けて郡主となり、相馬次郎を名乗った。
三男の千葉三郎胤盛は、武石郷を所領として与えられて武石三郎と名乗っていた。ほかに奥州の宇多・伊具・亘理の三郡も領していた。また、信州上田に武石という村があったが、ここも武石三郎の影響下にあった土地と言われている。
四男の千葉四郎胤信は、1180 年（治承 4 年）に所領として与えられた本郷の地に居館を構えた。これが馬加城の始まりと言われている。胤信は後に下総国香取郡大須賀を領し大須賀四郎を名乗り、本



郷の地は隣の武石を持つ三郎胤盛に譲った。この他に奥州岩城にも所領があった。
五男の千葉五郎胤通は、下総国葛飾郡国分郷を領し、香取郡矢作にも所領があった。以降代々に渡り国分氏を名乗っていたという記録が残っている。
六男の千葉六郎胤頼は、下総国香取郡東荘の３３の郷を所領し、他に三崎荘の５５の郷も持っていた。
東（とう）を名乗っていたが、一門の分流が東隣の三崎荘にも広がり海上（うなべ）を名乗った。

千葉六党とその末裔達は、こうして陸奥から九州に至るまでの各地に広がっていったのだが、時代の流れにより国家の主流が変容する中で、骨肉の争いに陥ることにもなった。

以上